

ワガドゥグにおけるイスラーム教育と近代化の可能性

清水貴夫

(広島大学教育開発国際協力研究センター・研究員)

サハラ砂漠南縁に沿うように広がるイスラーム文化圏では、ここ数年間はジハーディストと総称されるイスラーム過激派による暴力の脅威に曝されている。こうした、グローバルな文脈だけでなく、ローカルな文脈においても、長くムスリムの再生産を担ってきたクルアーン学校 (*école coranique*) と呼ばれるイスラームの私塾において、一部のイスラーム職能者 (マラブー) による子どもたちへの物乞いの強要、さらにそこで子どもに対して振るわれる暴力が報告されている。その一方で、地域の識者であり、教育者であるマラブーは、イスラームの本質を「寛容さ *tolérance*」とし、クルアーン学校で情熱的に宗教教育を実践するマラブーも少なくない。すなわち、神学上の教義や実践と表出するイスラームは正反対の状況におかれていると考えられる。

発表者は、こうした背景を整理すべく、西アフリカの村落部におけるクルアーン学校を調査し、現在まで、村落の社会システムの中に埋め込まれ、その存在感を示していることを示した (清水 2014)。都市部においてはどうか。ワガドゥグ市におけるクルアーン学校は 2010 年に 770 校と言われるクルアーン学校は、先述のとおり、社会問題を引き起こしていると考えられているものの、2005 年頃から私学化するクルアーン学校が大幅に増加している。それまで私塾的だったクルアーン学校が国家認定を得、私立の学校として変化を始めているのである。本発表では、このような西アフリカの都市部 (ワガドゥグ市) におけるイスラーム教育の現状を報告し、学校の現代的変容について論じ、現代アフリカにおけるイスラームの位置づけを考察していきたい。

清水貴夫 2014「ニジェール共和国における伝統教育と社会 ―ザルマ社会のイスラーム教育―」
大場麻代 (編) 『多様なアフリカの教育・ミクロの視点を中心に-』 未来共生リーディング
ス.Vol5. 大阪大学未来戦略機構第五部門, pp.69-79